



あまえて♥ 騎士ねえ様

あすなゆう

illustration ©みやま零

美少女文庫
FRANCE & SHOIN

その大きな目を見開いて、信のほうをまじまじと見る。夜の闇以上の底なしの闇がそこにはあつて、信も立場を忘れて見入ってしまう。

瞳がゆつくりと細められ、愛らしい唇がなぜか毒々しい印象の笑みを形作る。

「みつけた」

彼女は心の底からうれしそうな声を出した。

白い手指を信の頬に這わせると、長年捜^{さが}し求めた宝物を愛^めでるような手つきで感觸を確かめていく。赤子のような小さな手、その指の腹が吸いつき、冷たさが伝わってくる。

その冷たさに触れた時、信は初めて、目の前の少女に恐怖を覚えた。

普通の女の子じゃなかったら、彼女はいったい――。

「ずっと探してたんだから。女神様と同じげんしよのたましいを持つ人間。やっと見つけた。ひとみのおくの光も女神様といっしょだもんね。あは、ゼルミール、すごくうれしいっ！」

ゼルミールと名乗った少女は喋りながらも、信の体をまさぐる手をとめようとしている。服の下に入った手が、肌の上を滑るように這っていく。

「ちょ、ちよっと、やめてよ！ なに、してるんだよ」

声はなんとか出せるものの、変な術でもかけられているのか、四肢の自由がまった

く利^きかなかった。

「なに、って決まってるじゃない。あなた、高空信よね。女神様と対のそんざい。そのげんしょのたましいを味わいに、このゼルミールがわざわざ来てあげたのに。なんなの、そのたいどは！」

「な、なんなのって……」

いきなり氣勢をそがれる信。

——えーと、やっぱり僕が悪いのかな？ いや、でも、一応僕が被害者だし。

いくら考えてみても、被害者で犠牲者は信で、やっぱり怒る権利も自分にあるはずだと氣を取り直す。

「やっぱり、キミが怒るのはおかしいよ。今、こんなこと……」

話の途中で、ゼルミールにきつく見据えられてしまつて、口ごもつてしまう。

「まだ、文句があるの——あなたをどうするも、ゼルミールの自由なんだからね」
意地悪そうな笑みを浮かべつつ、彼女は信を鼻で笑つた。

彼女がなにかしたのは間違いなくて、けれど、体の自由が利かなくて、信に抗^{あらが}う術^{すべ}はなかった。

ゼルミールは信の体に直接、その手を這わせた。脇や胸もとなど敏感な部分を冷たい手が刺激していく。

同時にフリルスカートの下に隠れたゼルミールの膝が、信の局部に押しつけられた。「ええと、ここで、よかったんだよね……」

先ほどの勢いはどこへ行ったのか、おずおずと自分自身に確認するようにゼルミールは呟いた。

彼女の膝小僧の尖りが、信の腿の付け根をこねまわしていく。膝小僧の硬さと、太腿のやわらかさが交互に信を襲う。

ゼルミールが懐から取り出したのは、分厚い革の表紙の本で、大きさは手のひらぐらいのコンパクトなものだった。なかにいろいろと書いてあるらしく、少女はそれを確認する。

「やっぱり、ここでもいいんじゃない！ ほら、ほら、ほらあっ！」

ゼルミールはさらに、信の大事な部分に押し当てた、膝をぐりぐりとする。

「つく」

「あ、感じてるの。感じてるんだあ。えへ」

かすかにもれたうめきを捕らえて、ゼルミールは好奇心の赴くままに、さらに激しく信の屹立を刺激する。

「だんだん、大きくなってきてる……。なに、ゼルミールのご奉仕がそんなに気持ちいいんだ？」

信はゼルミールのなすがままで、寝返り一つはおろか、声さえも出すことができなかった。ただ、屹立はゼルミールの巧みな刺激で、しつかりと反応していた。

——こんな小さな子なのに……。

「すご、い。書いてある、通り……」

ゼルミールは、彼のズボンから屹立を取りだすと、それに見入ってしまう。生唾をぐぐりと、呑みこみつつも、目を離せないでいた。

おずおずと手を伸ばすと、それに触れる。起きあがった猛りの熱に、彼女は思わず手を引いてしまう。

それから、ゆっくりと、しごきはじめた。

「ずーっと、ずーっと、ゼルミール、探してたんだから。やっと、見つけた……」

屹立はさらに大きさを増し、それを手のなかで実感するたびに、ゼルミールは気持ちの高ぶりを抑えられないでいた。

ゼルミールは緩急を加えつつ、さらに激しく信の屹立を責めたてた。

「っ」

「あは、もう、ちよっと、もうちよっとだから……」

とんがり帽子の少女は雁首の表面を撫でまわし、胴を擦りたてる。暴発寸前のいきりをうっとり眺めながらゼルミールは、愛撫しつづける。

彼女の不思議な力が弱まったのだろうか、信はかすかに腕が動くのを感じていた。動こうと思えばできたのかもしれない。

でも、動けなかった。

「――」

初めて女性に触れられたのだからたまらない。次の瞬間には、屹立からは精が噴きだしていた。

ゼルミールはなまめかしい指遣いで彼のいきりを責めつづけた。幼い手指の淫らな蠢^{うごめ}きが白濁を溢れさせる。

「あは、やつぱ、すつごいのお。げんしよのたましいを感じる。それに、べとべとで……いっぱい出てるう」

ゼルミールの手のなかで少年のいきりはまだまだ硬直していた。生まれて初めて味わった異性の手の感触が心地よくて興奮と充血はまったく収まりそうもない。

ゼルミールは溢れて、手指に絡みついた白濁液を無邪気そうに舐めとっていく。幼い少女のあまりに淫靡^{いんぴ}な姿に信は恐れも忘れて見入ってしまう。

「はううう……もっと、もっと、ちようだいよお、ねえって――」

そこまで言いかけたところで、稲妻に打たれたかのように、ゼルミールの手は動きをとめる。

そして次の瞬間——彼女は信の上から姿を消して、離れた場所に跳び退っていた。そのゼルミールと、信との間に、突然、緑色の塊かたまりが立ちふさがっていた。空から舞いおりてきたらしいそれは、着地とともに地響きを立てた。

「う、そ——」

驚きで、信の口からはそれ以上、なにも言葉が出てこなかった。目の前の少女が現われた時以上の衝撃があった。

長い尾と折り畳まれた羽根、トカゲを髻ぼうかつとさせる頭部には太い角が二つ。緑色の鱗うろこで覆われた、どこかで見たことのある、しかし現実にはまずい生き物——巨大な竜、だった。大きさは象ぐらいだろうか、いやもう少しあるかもしれない。暗闇で輪郭が判然としなかった。根元がひと抱えの丸太ほどもある尻尾が信のほうに向いていた。

上に乗っているのは、真紅の西洋甲冑を身にまとった女性で、腕、脚部、腰、そして胸とその身体のほとんどの部分が、巧みに繋ぎ合わされた金属板で覆われていた。凛々りりしく張りだした胸先から力強く引き締まった腰まで、甲冑は彼女の身体の線をかすかに想起させるように流麗な線を描いていた。

真紅の甲冑姿を包みこんでいた白のマントが、夜風にかすかになびいていた。

甲冑の女性は、手綱を引き騎竜の首を少女のほうに巡らせる。彼女の短く切りそろ

えられた髪がかすかに揺れた。

凜々しい姿に、信は驚きも忘れて見入ってしまう。

彼女は透き通った、張りのある声でゼルミールに呼びかける。有無を言わせぬ強い意志が、その声にはあった。

「ゼルミールよ。これ以上、私の手を煩わせるつもりか。もう充分のはず。さあ、ランスロアへ戻らんか」

「まだ、来たばかりで、ゼーんぜん、遊んでないんだから。ゼルミール、もつといろんなものを見たいし、いろんなことがしたいんだもん」

「こちらへ来るのは、無用な混乱が起きるゆえ、女神レーネ様は固く禁じている。それは、ゼルミールも知っているよう」

「それは……。でも、ちよつとぐらい、いいじゃない。レーネ様だって、許してくれるハズよっ」

「それは詭弁であろう、ゼルミール。現にレーネ様がこうして私を遣わしている」

ゼルミールと、言い争っている甲冑の人物は知り合いらしかった。彼女を追いかけているのか。しばらく、ゼルミールと甲冑の人物の間で言葉の応酬がつづいた。

「なによ、お城の竜騎士なんか捕まったりしないんだから。もう、追いかけてこれないように、めちやくちゃにしてやるから！」

